

高校生の進路決定と仕事への構えについての一考察

鹿内啓子

目次

はじめに

I 高校生の進路決定

II 仕事への構え

—フリーターの問題を中心に

おわりに

はじめに

近年、若者の就業に関して社会の関心が高まっている。関心といってもその多くは青年を好意的に評価するものではなく、問題視したり非難したりするものである。その一つは、就業形態に関するものであり、具体的にはいわゆる「フリーター」や「ニート」と言われる若者の増加である。もう一つは、若者の仕事に対する構えや動機づけに関するものであり、就職しても仕事の厳しさに耐えられずに離職をする者が多いとか、仕事に対する動機づけ・意欲が低いという大人からの非難である。仕事をする上で最低限必要な社会人としての常識やコミュニケーション能力の欠如を指摘する声もこれに入るであろう。

若者の就業形態と仕事に対する動機づけは密接に関連するものである。仕事に対する意欲の低さがフリーターという就業形態をもたらすという側面があり、またフリーターという働き方からは仕事への意欲を育てることは難しいという側面もある。両者は相互作用しているということが言えるであろう。しかし就業形態は社会的な要因の影響を強く受けるものであるのに対し、仕事への動機づけは社

会的要因の影響は間接的なものであり、若者自身の内的な成熟により大きく影響されるものといえよう。そこで本研究では、進路選択態度や仕事への構えなどの内的側面と就業形態の側面に分けて、高校生を中心にした若者の職業発達における問題をみていくことにする。

I 高校生の進路決定

1. 進路決定理由

高校生はどのような過程を経て卒業後の進路を選択(決定)していくのか、この過程に関連する要因にはどのようなものがあるのだろうか。

淵上(1984)は、高校生に対して進学志望動機尺度を実施し、学業成績との関連を検討した。進学志望動機については、専門知識を深める、自分の可能性を求めるなどの「大学の本来的機能」、親孝行のため、親が勧めるなどの「家族への配慮と規範機能」、大学で遊びたい、周りの人が進学するのでといった「モラトリウム機能」、クラブに入りたい、多くの人と知り合いたいという「大学の副次的機能」、裕福な生活を送る、一流企業に就職したいといった「大学の経済価値機能」の5因子構造を確認した。これと学業成績との関連では、成績高群では「大学の本来的機能」と「モラトリウム機能」を持つものが多く、成績中群では「大学の本来的機能」が多く、また成績低群では「大学の本来的機能」をもつものが少なかった。

鈴木・椎名・石塚・柳井(1997)は、全国381校の高校生14318名について、進路意識に関わる要因、および進路意識と進学・就職動機との関連を分析しているが、志望学部によってこれらの関係はかなり異なることが明らかになった。教員養成系、医歯薬系、芸術系で進路展望が高いが、法経済系と理工系ではこれが低かった。法経済系や理工系の志望者は具体的な将来の職業イメージがないままに、理数系科目が得意＝理工系、文系科目が得意＝法経済系という短絡的な図式がイメージ化されていることの表われだと考えられる。とくに法経済系を志望する者の特徴をみると、学歴志向は高く文系学力も高いが、進路展望は低くモラトリウム動機も高い。大学へ入学してから将来を考えるとという構えをもっているといえる。専修学校志望者は、学歴志向は低く、学習努力に欠け学力も低い、モラトリウム動機は低く進路展望も高い。さらに、「学習努力」が低く「進路展望」も低い者を進路意識未成熟者として、その特徴を分析している。それによると、該当者がクラス当たり20%以上の学校が381校中5校あり、普通科よりも職業科に多く、進学少数校に集中している。進路意識未成熟者の学業成績については自己評価が低く、実際にも下位の者が多い。また進路に対する態度に関しては、将来の進路を決定するものとして運と能力を重視して努力を低くみなし、希望進路の実現可能性を低く認知しているが、その一方で興味・関心を重視した進路決定の可能性は被調査者全体より高く考えている。大学等への進学希望の進路意識未成熟者についても、志望学部や志望職業が未定の者がもっとも多かった。努力は目標到達に密接に関わるものであるが、目標への到達可能性を低くみなしたり、目標自体が不明の場合には、努力の効用はなくなり、その価値を見出せなくなり、学業成績にも反映してくる。進路意識未成熟者に進路未定の者が多いことを考えると、まさに彼

らが目標喪失の状態に置かれていると言わざるを得ないと述べている。

古澤・山下(1993)は、進路別の志望動機と実際の進路との関係を女子高校生で検討している。ここでは高校の教員に対して、生徒が大学・短大、専門学校、就職を志望する(せざるを得ない)理由について自由記述を求め、それを元に進路志望動機項目を選択し、女子高校生に評定させた。その結果、大学への進路動機では、「モラトリウム動機」、「機会動機」、「親・先生の勧めと家族への配慮動機」、「進路・技能獲得動機」が見られた。専門学校への進学動機では、「受動的動機」、「中心的動機」、「モラトリウム動機」、「自由・独立動機」、「学力不足の意識と勉強意欲動機」が見出された。最後に就職志望動機については、「勤務先の積極活用動機」、「親・先生の勧めと家族への配慮動機」、「自由・独立動機」、「生活享楽動機」が見出された。さらに専門学校を志望して実際に専門学校へ進学した者と、大学・短大志望だったが実際には専門学校へ進学した者とで専門学校進学志望動機を比較したところ、「自由・独立動機」が前者で高かった。また就職した者についても同様に、最初から就職希望だった者と、大学・短大志望や専門学校志望だった者とを比較したところ、就職希望だった者のほうが「自由・独立動機」が高く、「親・先生の勧めと家族への配慮動機」が低かった。最初から専門学校や就職を希望していた者は、家庭の状況というよりも本人の意思で独立を望んで就職あるいはそれを見据えた専門学校進学を選択しているといえよう。ここでは生徒個人の志望進路について回答をもとめているのではなく、共通の項目について、3つの進路それぞれを志望するとしたら各項目がどの程度動機として重みをもっているかを回答させている。その結果、専門学校と就職では「自立・独立動機」が抽出されたが、大学では見いだされなかったことは、大学進学が将来の自立・独立を目指したもの

という意識は薄く、モラトリアム期間であると認識されていることを示している。また大学志望と就職志望では「親・先生の勧めと家族への配慮動機」が見出されたが、家計や学力が許せば親や教師は大学進学を勧め、そうでなければ就職を勧めるのであろう。専門学校進学は生徒自身の希望や意思で決定している傾向が強いといえる。

リクルート（2003）は全国の高校3年生とその保護者316組についての進路に関する意識調査を行った。進路選択理由を複数選ばせた結果をみると、大学・短大への進学理由では、大学の本来の機能に関する理由の選択率は、「学びたいことがある」71.5%、「仕事に役立つ知識や技術を身につけたい」56.5%、「教養を身につけたい」36.2%、「希望する資格や免許を取るため」44.9%、「したい仕事に大学・短大卒業が必要」28%であった。モラトリアム動機については、「学生生活を楽しみたい」54.6%、「すぐ社会に出る自信がない」32.4%、「まだ働きたくない・しばらく遊んでいたい」21.3%、「やりたいことが見つからない」18.8%であった。親や友だちなど周囲の影響に関しては、「親が勧める」15.9%、「先生が強く勧める」4.3%、「友だちの多くが進学する」10.6%であった。その他、「学歴が欲しい」24.2%、「進学は当然だ」15.5%、「特に理由はないが何となく」1.0%であった。これに対して専門学校への進学理由については、大学・短大への進学理由より本来の目的が多く、モラトリアム理由は少ない。親・教師の勧めと友だち追従も少なかった。就職の希望理由については、自立・独立がもっとも強く（49.4～26.5%）、経済的理由（家計を助ける、親に負担をかけたくない、経済的に進学できない）がこれに次ぐ（34.9～18.1%）。その他、「勉強がきらい」41.0%、「進学には成績が不十分」12.0%であった。

これらの結果からは、今の高校生が学びたいことがあるとか、知識や技能を修得したい

とか、資格を得るためなど、それぞれの進路の本来の目的に合致した理由から進路を決定しているといえよう。しかし将来的な展望をもって本来の目的の達成を目指しているのかどうかはこれらの結果からは判断できない。また、本来の目的で進路を志望する一方で、大学・短大進学においては社会にでるのを猶予させるというモラトリアム的な理由もかなりみられる。就職志望においては自立・独立の動機が共通して最も高く、経済的理由がこれに次ぐという結果は肯けるものである。

2. 進路決定地位

Erikson, E. H. (1982) は青年期の心理社会的危機をアイデンティティの確立と捉え、自分が何者であり、どのような価値観や態度をもって生きていくかを決めることが青年期の最大の課題である主張する。どのように生きていくかに関わる重要な決断の一つは職業選択である。自分に相応しい仕事に就くことができ、さらに仕事を通して自己実現をしていくことができれば、ひじょうに望ましいキャリア発達を遂げることになる。職業選択はこのような重要な決断であるので簡単に決めることはできず、自分に相応しいものを決めるまでにはさまざまな試みや葛藤を経験（役割実験）し危機を経ることが重要であり、この過程を彼は模索と名付けた。しかし当然のことながらすべての青年が模索を経て自我同一性の確立に達するわけではない。アイデンティティが拡散した状態のまま職業決定ができない若者も、模索や葛藤を経験せずに平穏なまま職業を決定していく若者もいる。

下山（1983）は、進路決定を青年期中期から後期に至る発達課題としてとらえ、進路指導が多くの場合受験指導という形で行われている我が国における高校生の進路決定の状態を検討している。公立高校3年生を対象に、SCT、進路決定についての選択肢および自由

記述に基づいて、下の8つの進路決定地位を見出している。

達成：模索経験を通して、具体的進路を選び、その方向で自己実現の努力を始めている。

早期完了：模索なしに、すんなりと具体的進路が決まっている。将来に対して現実的で肯定的展望をもち安定している。

防衛：不安の防衛のために、自己の進路を限定し、それに強く identify している。決定過程において硬さ、不自然さが感じられる。

希望：将来に向かっての希望が決まったという状態で、具体性が乏しい。将来に対し楽観的であるが、現実吟味に欠ける。

模索：将来に向かっての自己限定に真剣に取り組んでおり、進路決定に関して前向きに模索している。

猶予：具体的に進路を決定するのは未だ先のことと考えて、決定を先に延ばしている。自己限定について、切迫性はなく楽観的である。

危機：進路決定をしようとするが、決まらず混乱している。進路決定を前にして、何かしらの不安をもって対処している。

無関心：進路決定については無関心で、自己の将来に対して現実的な展望がない。過去の統合ができていない。

進路既決者は全体の約60%であったが、達成は全体の5.7%に過ぎず、模索なしで決定した状態（早期完了、防衛、希望）が全体の53.8%に達していた。進路未決者についても模索は全体の21.7%であり、無関心地位のものはいなかったが、猶予と危機を合わせると21.7%であった。この結果から、下山は、進路既決といっても真の決定過程（模索）を経て決定したものは少なく、多くの生徒は、受験という外部から一方的に押し付けられる課題を前にレディネスがないまま未熟な決定をせざるを得ない状況であると述べる。また早期完了、希望、防衛の生徒は、本来なら内的発達課題であるべき進路決定を外的課題としてとらえ、それに未熟な順応をしている状態

であり、今は進路決定したことに安定しているが、大学などに入った後に未熟さが問題として生じる可能性を述べている。

藤巻・高木(1996)は、下山(1983)に倣い、高校3年生の進路決定地位を評定し、大学、短期大学、専門学校、就職の希望進路別に検討した。その結果、全体の約7割が進路を決定し、また全体の25.9%が模索を経て決定をしている達成地位であった。とくに専門学校希望者では43.6%が達成地位にあり、下山(1983)よりも多い。下山では対象者の多くが大学進学希望であったことによると考察しているが、ここでも大学進学希望者は他の進路希望者に比べて達成が少なく(12.0%)、猶予、希望、危機の割合が多くなっている。また職業的進路成熟尺度について比較した結果でも、大学進学希望者は自立性(進路への主体的な取り組み)、計画性(将来展望と進路についての計画性)、関心性(進路に対する積極的な関心)のいずれについても、専門学校希望者より成熟度が低かった。藤巻らも大学生の進路未成熟を、受験体制の中で自分探しをする時間的余裕を与えられていないことに大きな原因の一つがあると考察している。

浅川(2006)は、高校生に進路選択時に悩んだことを尋ねたところ、適性把握(自分がどんな仕事に向いているかわからない)と目標発見(やりたいものが見つからない)について悩んだ生徒が多かった。そこでこの2つに対する肯定と否定の組み合わせで、4群に分けたところ、適性把握も目標発見もどちらもできていない生徒がもっとも多く、全体の44%を占めていた。進路希望を尋ねた結果では未定の者はわずか1名であったことを考え合わせると、半数近くの生徒が、自分が向いている仕事もわからずやりたいことも見つからない中でともかく希望する進路だけは決めているということになる。また希望進路と適性把握と目標発見の組み合わせとの関係をみたところ、就職希望と短大進学希望で

は両方ともできていない場合が36～40%と、もっとも多く、両方できている場合は16～20%に過ぎなかった。専門学校希望では両方できている場合が多く36%であり、両方できていない場合と同じであった。4年制大学希望では両方できている場合が30%、両方できていない場合が40%であった。4年制大学希望者はモラトリアムのために進学するものが多いのであろう。

Tiedeman, D. V. (1961) は、職業発達を、職業生活に入る前の予期の段階と職業生活に入ってからの実行と適応の段階に大別し、予期の段階をさらに、探索、結晶化、選択、明確化の4つのステージに分類している。選択がなされる前に、幾つかの可能な目標が自分自身の興味や適性、および周りの環境の諸条件を考慮しながら熟考される探索のステージと、考慮されるすべての目標についてそれに関連する事柄を整理する結晶化のステージを経ると考えている。

Erikson, E. H. (1982) は後期学童期から大学在学期までの長期化した見習い期間を、心理・社会的モラトリアムであり、最終的なコミットメントの延期が認められている期間とみなす。そして、これが性役割の実験を含む役割実験のための比較的自由的な活動空間を提供するが、これは社会自体の適応的な自己-革新にも極めて重要な意味をもっているという。Super, D. E. (1957) もまた、青年の学校や社会での探索活動の重要性を指摘する。このような活動を通して自己概念を現実的・客観的なものにし、仕事と自分の適合性を吟味する機会を得るという。

このように青年期には自分の適性、可能性、要求などを探りながら試行錯誤をして、次第に方向を定めていく時期である。この間には当然迷いや葛藤などが生じ、若者は自分でそれを解決していくことが求められるが、十分に吟味して解決するにはある程度の時間が必要である。

しかしこのような探索や役割実験を通して自分を試す機会がないまま、決定を強いられたり急かされたりする傾向は近年ますます強まっている。リクルートが行った調査「進学センサス 2007」報告では、2007年の調査結果と1999年のそれとを比較しているが、高校生が進学か就職かを決めた時期、理系か文系かを決めた時期、学んでみたい分野を決めた時期、三者面談など個別の進路指導が始めて行われた時期、いずれも1999年に比べ2007年で早くなっている。2007年では、これらの決定を高1で行った生徒の割合がもっとも多かった。多くの高校では2年生から理系と文系のクラス分けがなされるため、高校入学後1年も経たない内に三者面談で理系か文系かを選択しなければならない。自分の将来の生き方をじっくり考えるどころか、模索する時間的余裕も与えられないまま、受験教育のルールの上を走らされる状態に置かれる。生徒の立場で考えれば、いろいろ役割実験をして自分の適性や能力を現実吟味して把握する機会もなく、また自分の興味を喚起したり能力を高めたりすることもできないうちに進路を決めさせられるのであれば、まじめに模索することは反って不適応の状態に自分を追い込むことになる。決めさせられたルールを迷わず進んだほうが適応的な行動となるのである。下山 (1983) が防衛と名付けているように、早期完了や希望も自分を守る手段だとみることができる。また鈴木・椎名・石塚・柳井 (1997) が指摘しているような、理数系の高学力＝理工系への進学、文系の高学力＝文系への進学という短絡的な進学決定も、模索の余裕のない状況では当然なされるものであろう。

小此木 (1981) は、青年期の価値が上昇し若者文化が生み出されたことによって、今日の青年には従来の不安定や動揺といった消極的特徴がなくなり、開放感や全能感といった特徴が強く表れるようになったと指摘し、こ

のような状態を「新しいモラトリアム心理」と呼んでいる。早期完了や希望地位は新しいモラトリアム心理に共通するものをもっているといえよう。

3. 職業意識

浅川(2006)は、北海道の一つの市に限定されてはいるが、高校生の職業意識を多角的に検討している。ちなみに調査の前年(2003年度)のS市の高校3年生の進路は、北海道全体と比較すると、就職と専門・各種学校進学が多く、4年制大学進学が少ない。まず職業意識をみたところ、志向の強さは、仕事以外の生きがい志向>安定志向>専門化志向>社会的貢献志向>適性重視志向>経済的成功志向>若年転職志向>マイペース志向>社会的名声志向>現在中心志向、であった。これらについてクラスター分析を行い、4つのクラスターに生徒を分類した。第1クラスターは、仕事以外の生きがい志向、専門化志向、安定志向が強く、マイペース志向と社会的な名声志向が弱いという「安定琢磨」型であり、197名中57名が当てはまった。第2クラスターは、社会的貢献志向、専門化志向、適性重視志向が強く、現在中心志向、マイペース志向、経済的成功志向が弱い「貢献琢磨」型であり、43名が属した。第3クラスターは、どの志向においても他のクラスターより弱く、もっとも消極的な職業意識をもつ「期待しない」型であり、39名が当てはまった。第4クラスターは、これとは逆にすべての志向で相対的に強く、一般的に積極的な職業意識をもつ「すべて望む」型であり、58名が該当した。

「適性把握ができているか」と「目標発見ができているか」との関連をみると、「貢献琢磨」型で両方できている場合がもっとも多く、47%であり、両方できていない場合は16%であった。「期待しない」型では両方できていない場合が圧倒的に多く72%を占めていた。

「すべて望む」型も一見積極的な職業意識に反して、両方できていない場合が50%を占め、両方できている場合はわずか16%であった。

松本(2008)は、6都道府県の高校20校の2年生2191名に質問紙調査を実施し、職業観(職業を通して実現できること)の構造を検討した結果、5因子が得られた。自分の好きなことに打ち込むこと、自分の生きがいになることなどの「自己実現志向」、人類の繁栄に貢献すること、国を発展させることなどの「社会理想志向」、名声を得ること、高い地位につくことなどの「地位条件志向」、家族の生活のために役立つこと、自分の雇用を安定させることなどの「生活安定志向」、そして、自分の与えられた使命を全うすること、社会の一員としての義務を果たすことなどの「使命役割志向」の5つである。これらの志向の強さをみると、生活安定志向>自己実現志向>社会理想志向>地位条件志向>使命役割志向の順であった。地位や名声や社会での使命よりも個人的な生活や自己実現を重視していることを示す結果である。希望進路による比較では、自己実現志向において、専門学校進学>大学・短大>未決定、就職という順であったが、他の志向には差が見られなかった。

三後・金井(2004)では、キャリア・パースペクティブ(どんな生き方をしていくかという長期的見通し)、就職不安、就職意欲などについて志望進路別の比較をしている。これによると、キャリア・パースペクティブについては志望進路による差異が明確であり、専門学校進学がもっとも高く、次いで大学進学、就職、未定となっている。就職後の生活不安では就職志望がもっとも高く、大学進学がもっとも低く、両者の間に有意差があった。就職できるかどうかの不安では、やはり就職志望でもっとも高く、専門学校進学で最低であった。適職不明不安については志望進路による差異が明確で、未定がもっとも高く、次いで就職、大学進学、専門学校進学の順であっ

た。逆に就職意欲については、自己実現意欲で専門学校志望がもっとも高く、次いで大学志望、就職志望、未定となった。自立意欲については専門学校志望と就職志望が高く、未定が低くなっている。就職するのは当然だという規範的意欲では、就職志望と大学志望が専門学校志望と未定よりも高いという結果である。

職業意識に関するこれらの結果には共通するものがいくつかみられる。一つは、高校生が職業を通して求めていることは、安定した生活を送ることであり、その中で自分の専門的スキルを磨き、仕事に打ち込むことであり、社会的な名声や社会の理想を求める生き方は望んでいないということである。個人あるいは自分の家族という範囲に目が向けられ、社会の一員であるという意識は弱いといえよう。若者の社会意識の低さ、社会への無関心が指摘されているが、これと一致する方向の結果である。二つ目は希望進路別に職業意識をみた場合、専門学校志望者がもっとも明確な職業意識をもち、大学志望者は専門学校志望者に次ぐが、必ずしも明確な職業意識や将来の見通しをもってはいないということである。専門学校志望者の職業意識が明確であることは、専門学校が特定の範囲の職業に特化していることから当然の結果であろう。しかし大学志望者も学部（学科）を選んで受験するのであるから、ある程度の将来の見通しをもってもいいはずであるが、必ずしもそうではない。職業と直結する学部は別にする、自分の得意科目や曖昧な興味によってとりえず学部を選択し、最終的な選択は先送りしている者がかなりいるのであろう。

そうであれば、下山（1983）が指摘するように、大学入学後に未熟さが問題化する可能性がある。転学部や転学科を希望する学生が増えてくることが考えられる。あるいは早期完了が問題なく続き、平穩に卒業し就職していく者も多いのであろう。

II 仕事への構え — フリーターの問題を中心に

小杉（2005）は、フリーターを「夢追い型」、 「やむを得ず型」、 「モラトリアム型」の3タイプに分けている。「夢追い型」は1980年代に多くみられたタイプで、正社員になって組織に縛られた生き方をすることを嫌い自由な時間や生き方を重視するためにあえてアルバイトという働き方を選ぶ、あるいは自分の夢を実現するためにアルバイトを選ぶ若者を指していた。しかし90年代になってからは、景気の後退とともに特に高校生への求人数が激減し、就職したくてもできない若者、あるいは家庭の経済状態が上級学校への進学を許さず、進学費用を貯めるためにアルバイトをするというタイプが急増した。これが「やむを得ず型」である。また「モラトリアム型」は、やりたいことが見つからないとか自分に適した仕事が見つからないのでとりえずアルバイトをしながら考えたりみつけたりするというタイプで、これも増えてきている。

フリーターという働き方が世間の注目を集めてから久しく、批判的に見られてきたにもかかわらず、非正規雇用は減るどころか増えている。とくに高卒や中卒（＝高校中退）の若者の非正規雇用が増えている。経済情勢の逼迫によって、企業が正社員の雇用を控えて非正社員の採用を拡大していること、それに伴ってこれまで高卒者の仕事であったところに大卒者が進出してきたことなどにより、これまで高校から職場への移行がスムーズになされてきた日本のシステムが機能しなくなってきた。このような状況の中で、経済的および学力的な問題から、上級学校への進学もできず、正社員としての就職もできない高卒者は必然的にフリーターとなっていく。

以下に、フリーターに対する意識、および若者への就業支援についてみていく。

1. フリーターに対する高校生の意識

浅川(2006)は、フリーターが生じる原因、フリーターへの評価、フリーター問題の重要度の認知、だれもがフリーターになる可能性の認知から高校生のフリーターに対する意識を検討している。働き口が減っているので仕方がないに対しては83%が肯定し、同時に本人が無気力なせいだと思ふものも61%おり、社会的状況と本人の両方を問題だと認知している。やりたいことを探すためにはいいことだと肯定する割合は61%であり、夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいいと40%が肯定している。ある程度肯定的に評価していることがわかる。そのうちにきちんとした仕事に就く人が多いのでたいした問題ではないについては65%が否定しており、だれでもそうなるかもしれないに対しては、70%が肯定している。フリーターが他人事ではなく、社会的にも問題であると認識しているといえる。

小河・松岡・朴木(2008)は高校1～3年生に対してフリーターのイメージを調査している。カッコいい、おもしろそうというイメージに対しては多くが否定的であるが、夢をもっている、一生懸命生きているについては半数近くが肯定しており、ある程度のポジティブな評価をもっている。また世間体がよくないと多くがとらえ、半数が努力が足りないともみている。気楽そうだと自由で生きているともみている高校生は6割強で心理的なフレキシブルさを感じているようであるが、いつでも気軽に仕事を辞められるとか、自分が好きな時間だけ働けるといった労働条件や待遇ではフレキシブルさを認めていない傾向があった。さらに「フリーター希望」、「フリーターになりたくない」、「場合によってはフリーターになるかも」で選択させたところ、希望はほとんどおらず、なりたくないが70%を占めたことから、正社員志向が強いといえる。一方、30%は自分がフリーターになるか

もしれないと思っており、この傾向は進学校で少なく、進路多様校で多かった。

以上のように、フリーターを自分探しのためにある程度は認めているものの、積極的に希望する高校生はほとんどおらず、むしろネガティブに評価している。その一方で、フリーターにならざるを得なくなる可能性を認めている。高卒(中卒も含めて)のフリーターのほとんどは、小杉(2004)の「やむを得ず型」と考えられる。

2. 高校生の生活文化の変化

若者の働き方の変化は前述のように社会経済の情勢の変化による部分が大きい。他方若者の生き方の変容も原因の一つと考えられる。

轟(1998)は、高校生の生活意識と職業意識について、1981年調査と1997年調査の比較をしているが、以下の点で明らかな変化がみられた。

まず、「親が呼び出されるような校則違反をしたことがある」は1981年より1997年で減少したが、「遅刻・無断欠席をしたことがある」と「無断外泊をしたことがある」は増加した。また「授業をサボったり、学校を休みたくなることもある」も1997年で増加していた。さらに「学校にいるときよりも学校の外での生活の方が楽しい」も増加し、1997年では半数がそう思っていた。これらの結果から、轟は高校生の生活感覚は「脱学校」の方向に向かっていると述べている。

耳塚(2003b)は、高卒無業者を増大させた要因として、高卒労働市場の逼迫と高校生文化の変容を挙げている。高校生文化の変容は、学校生活の比重の低下と消費生活へのコミットメントの増大である。従来の高校生の生活規範から逸脱したサブカルチャーとの親近性が高くなっている。このような生徒を耳塚は「パートタイム生徒」と名付けている。

このような生徒の多くは、学校生活に意味

を見出せない、あるいは居場所のない生徒であろう。渡辺（2007）は、若者の労働意欲の低下は、「働く」ことだけへの意欲の低下なのかという疑問を投げかけている。学校時代に承認された経験のないことからくる自信喪失や劣等感の結果、何事につけても「積極的に向かえない状態」の一表現ではないのかと述べている。学校を面白くないと思う生徒が学校外での生活を楽しむためにはお金が必要である。従来は家計が苦しい生徒だけが行っていた、また職種も限られていたアルバイトを、多くの高校生が当たり前のようにやり、自由に使えるお金を手に入れるようになった。このようにアルバイトで手取り早くお金を手に入れることに慣れてしまったために、このような働き方に親近性を高めたことが考えられる。

3. キャリア・モデルの必要性

三後・金井（2004）は、高校生の職業選択過程におけるキャリア・モデルの役割を検討している。高校生に職業や働き方に関して理想とする人物、あるいは目標とする人物を挙げさせたところ、キャリア・モデルありは全体の3割であった。またキャリア・モデルがある群とない群を比較した結果、キャリア・モデルをもつ者はキャリア・パースペクティブが高く、職業選択過程に対する自己効力感も高かった。また就職不安が低く、就職意欲が高いことも明らかであった。

また松本（2008）は、「就きたい職業を選ぶ場合によい意味でモデルとなる人物が存在するか」、「この人のようにはなりたくないという反面教師的な人物が存在するか」という間で正負のモデルの有無を尋ねたが、正負いずれもいる、または正のモデルだけいる場合は、負のモデルしかない場合よりも、自己実現志向、社会理想志向、地位条件志向、使命役割志向のいずれも強かった。

鹿内（2005）においても、大学生を対象と

していたが、同性の親を生き方のモデルとすることが職業未決定状態を弱めることが明らかにされた。

渡辺（2007）は、若者の働く意欲が低下しているとしたら、それは働く大人から働くことの面白さを聞くことができず、逆に生彩のない姿を見て働くことは面白くないのだというメッセージを受け取ってしまっているためかもしれないと述べている。すばらしい教師に出会ったことから教師を目指すようになったという例をよく耳にするように、身近な大人の働く姿は若者に大きな影響を与える。最近小学生から職場体験の機会が与えられるようになってきた。このような機会は実際に仕事を体験してみるものの効果はもちろんであるが、職場で働く大人の姿を間近で見ることができるということの効果が大いのではないだろうか。

4. 自分に合った仕事へのこだわり

渡辺（2007）は、若者の労働意欲が低下しているように見えるのは、「興味・関心と一致したことでなければ、やる意味がない」と信じ込んでいるが、「興味・関心をみつけるすべを知らない」ためかもしれないと述べている。松本（1992）によれば、職業には、生活の維持、社会的役割、個性の発揮の3つの側面がある。職業を通して自分の適性や能力を活かす、あるいはそれらを伸ばすことは、働く目的の重要な一つであることは確かである。これまで述べてきた研究でも、自己実現は職業意識の重要な側面として取り上げられている。リクルート（2003）の調査でも、90%以上の高校生が、「自分のやりたいことができる学校に進学したい」、「自分の個性や能力を生かせる学校に進学したい」と思っている。また親も同様に90%以上が、子どもに「本人の個性や能力を生かせる学校に進学して欲しい」、「本人のやりたいことができる学校に進学して欲しい」と思っている。また進路の話

をするときに親がよく使う言葉を高校生に挙げさせたところ、「好きにきなさい、自分の好きなことをやりなさい」、「行きたいところに行きなさい」、「思うとおりのことをやりなさい」が多かった。

しかし前述のように、高校入学後から次々に進路についての決定を迫られる状況では、自分の適性や個性を見つけることは難しい。様々な経験や試行錯誤を通してじっくり把握していくものだからである。そのような時間的な余裕も機会もないままに、脅迫的に自分に合った仕事をしなければならないと思わされているため、それを見つけれない不安が強くなり、反って身動きがとれなくなることが考えられる。自分を試す機会や職業訓練の機会が若者には必要であろう。

おわりに

高校生は世間で言われているように勉学や労働に対する意欲がないわけではなく、進学にしても就職にしても自分の力を伸ばしたいという願いをもっている。しかし同時に自分が将来何をして生きていったらいいのか、自分に合った仕事は何なのかをつかむことができず、漠然とした不安を抱えている。ある程度の学力を備えている生徒は、要領よく目標を決めて自分の不安から身を守ろうとしていることも多いだろう。

今、生徒の学力や勉学意欲は二極化しているといわれている。低学力の生徒たちは学校で自分の適性を試す機会も自分の力を伸ばす機会も与えられず、学校での居場所をなくしている。若者の身近なキャリア・モデルとなり得るのは親であるが、家庭の教育力が低下したり家族の接触が少なくなっている今、親をキャリア・モデルにできる若者は多くはない。家庭の外でそのような大人に出会う機会も限られている。このような状況で自分のキャリアの見通しをもつことは難しいだろう

う。高校生、また高校卒業後や高校中退後の若者に対するキャリア教育の機会、職業訓練の場、キャリア支援の場がぜひとも必要だと思われる。これからの社会を担っていく若者がそれぞれの仕事を通して社会の構成員としての役割を果たしていくことは、社会にとって好ましいことは言うまでもない。

[引用文献]

- 浅川和幸 2006 進路指導の転換期における高校生の職業意識——北海道S市を事例に——北海道大学大学院教育学研究科紀要, 98, 37-68.
- Erikson, E. H. 1982 The Life Cycle Completed A Review Rikan Enterprises Ltd. W.W. Norton & Company, N.Y. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル, その完結みすず書房.
- 淵上克義 1984 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
- 藤巻かおり・高木秀明 1996 高校生の進路態度についての一研究 横浜国立大学教育紀要, 36, 197-204.
- 古澤輝幸・山下利之 1993 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106.
- 小杉礼子 2004 フリーターの登場と学校から職場への移行の変化 寺田盛紀(編著) キャリア形成・就職メカニズムの国際比較——日独米中の学校から職場への移行過程—— 晃洋書房 pp.100-111.
- 小杉礼子 2005 フリーター・ニートの実態と増加の背景 高校教育 38, 8, pp.20-25.
- 松本浩司 2008 高校生の職業観の構造と形成要因——職業モデルとの関連を中心に—— キャリア教育研究, 26, 57-67.
- 松本卓三 1992 現代社会と職業 松本卓三・熊谷信順(編) 職業・人事心理学 ナカニシヤ出版 p.13.
- 耳塚寛明 2003 進路が決まらない青年 青少年問題, 50, 5, 28-33.
- 小此木啓吾 1981 モラトリアム人間の時代 中公文庫.
- リクルート 2003 高校生理解学——親子の進路観に迫る—— キャリアガイダンス, 354, 10-35.
- リクルート進学カンパニー企画室 2007 高校生

- の進路選択行動はどうか変わったか リクルート「進学センサス 2007」報告 カレッジマネジメント, 146, 5-34.
- 三後美紀・金井篤子 2004 高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム 寺田盛紀(編著) キャリア形成・就職メカニズムの国際比較 — 日独米中の学校から職業への移行過程 — 晃洋書房 pp.25-37.
- 鹿内啓子 2005 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人のイメージ 北星学園大学文学部北星論集, 42, 69-88.
- 下山晴彦 1983 高校生的人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 56-61.
- 鈴木規夫・椎名久美子・石塚智一・柳井晴夫 1997 高校生の進路選択に関わる要因分析 大学入試センター研究紀要, 26, 1-28.
- Super, D. E. 1957 The psychology of Careers an introduction to vocational development Harper & Brothers 日本職業指導学会(訳) 1960 職業生活の心理学 職業経歴と職業的発達 誠信書房.
- 轟 亮 1998 高校生の職業意識の持続と変容 — 社会調査データを用いた「異質世代論」の検討 — 北海道大学文学部紀要, 47, 151-187.
- 渡辺三枝子 2007 キャリア教育の現状とこれからの可能性 高校教育, 40, 13, 26-30.

[Abstract]

A Study of Career Decision and Attitude Toward Jobs of High School Students

Keiko SHIKANAI

This study investigates motives of career decision, vocational attitude and attitude toward jobs of high school students. As to motives of career decision, essential motives such as acquisition of knowledge and development of skills are mentioned by many students. But many students who wish to go on to university mention moratorium motives. Among the students who decide their future after leaving school, students of Achievement Type who experience exploration are in the minority. Many students are Foreclosure Type who decide their future easily. As to attitude toward jobs, most students evaluate non-regular labor negatively. Young people who engage in non-regular labor are increasing. The economic situation in Japan is a major cause of the increase of non-regular labor. On the other hand, considerable change in the lifestyle of young people is also an important cause. Students of low academic ability have a tendency toward deviation from school culture and do not have opportunities for career education. They finish high school without a career perspective. It is very important to build up a system of career guidance for young graduates.

Key words: High School Students, Career Decision, Vocational Attitude, Non-regular Labor